



高橋 一平 たかはしいっぺい

1977年東京都生まれ。東北大学工学部建築学科卒業、横浜国立大学大学院計画建設学専攻修了。西沢立衛建築設計事務所を経て、2010年高橋一平建築事務所設立。『七ヶ浜町立遠山保育所』（2010）、『横浜国立大学中央広場・経済学部講義棟2号館』（2018）、『アパートメントハウス』（2018）、『河谷家の住宅』（2019）などの建築設計を手がける。

TAKAHASHI IPPEI

横浜国大の特徴は感性の豊かさ

高橋 それまでの横国は割と「感受性で勝負」みたいなところがちょっと多くて。AO入試もほとんど数学の問題なんか解けないような人が、良い感性持っているだけで入ったりして、そのままそういう教育方針だから伸びて、終には勉強も良くなるっていう。もともと頭いいんだろうけど。勉強のセンスも身につくっていう。だから**横国の特徴っていうのはとにかくセンス**だよ。物事に対する感受性とか捉え方が他の大学生とは全然違う。

寺西 内側にいるとわからないですけど…。

高橋 そうだよ。分かんないんだけど。よその大学の人と交流すると、もう全然自分とは違う人種だっと思うかもしれないよ。

亀井 それってなぜかそういう人が集まるのか、もうずっと代々そういう色があるから染まっていくのかどっちなんですか？どっちもなんですかね？

高橋 そうね。代々染まっていく伝統的なものの良かれ悪かれもある。横浜国大は非常勤が厳選されてますよね。すごい慎重に非常勤の建築家を選んでるから。野沢さんとかね。野沢さんがずっともう30年いるとか。あと富永さんが来たり。まあ西沢さんがいることは横国だからね。北山さんの思想で、今の非常勤の顔ぶれっていうのが選ばれてきたっていうのもあってね。割と厳選されているんだよ。全然そういうところからも雰囲気ができちゃう。毛色の違う建築家っていうのがいない。そういうなんか統合されたというか、

マネジメントされた環境はやっぱり横浜国大にはあるんじゃないかね、キャンパスの作られ方とか。あと内部の先生の影響がすごく大きいと思う。内部の先生が素晴らしいよね、横浜国大はやっぱり。よその大学の講評会とか行くとね、そうじゃないんだよ。逆に言えば横浜国大っていうのはアカデミックな大学っぽくはない。大学っていうのは思想と思想のぶつかり合いで先生同士もぶつかりまくるわけ。しかも知的なレベルで。横浜国大っていうのは割とないんだよ。それは先生が有名だとか優秀だとか著名だとかってことではなくてね。人間性の問題なのかも。人格とかあるのかもしれないね。優しい先生多いよね基本。研究内容に対する厳しさよりも、まずは人っていうのがやっぱりあるんだと思うなあ。それは非常勤もそうだし、西沢さんとか藤原さんもそうでしょうし、高見沢先生とか、野原先生とか、大原先生とか、菅野先生とか、張先生なんかもそうだよ。みんな基本ヒューマンリティに溢れた人がいっぱいいる。そこで急に締め切り守らなくてギスギスするような先生ってそこまでないじゃん。まあしれっと単位落としたりする人はいるかもしれないけど（笑）でも基本雰囲気ってのは横浜国大の良さがあると思う。ただ、**結構社会に出ていった時に淘汰されがちなのよ、横浜国大出人って。締め切り守らないとかね。それが普通だ、誰かが許してくれるだろうみたいな甘さはやっぱり出てしまうから、そこは社会だと苦労すると思うよ。**だから設計やる人はアトリエ

事務所に行く人が多かったり、アウトローダーだからね。でもアトリエ事務所もすぐ辞めちゃう人とか結構いますからね。今は自分にとって理不尽と思うことがあったとしても20代はすべて経験したほうがいい。だからそういう意味では、芯の強い今年の4年生は結構期待しているんですけど。ちょっとやさっとのことじゃ夢とか、目標を持ったものを諦めないでしょ、あなた達きつと。そういう感じがする。**今までと比べると、執念、ある意味時代が、ちょっと昔の感じというのもあると思う。**根性とか精神論みたいなものが、言われなくてもなんかどっかにあるなっていう感じがしますかね。4年生を見たのが初めてだったんだけど、それまではポートフォリオでしか4年生の課題って見なかった。夏休みの前の大学院の試験の前に、ポートフォリオ見てくださってみんな持ってくるんだけど、意外と失速する人が多いんだよ。3年後期終わって4年の前期で。でも今年は失速しなかった。割とみんな2年、3年、4年って順当に成長しているというか、力が付いている感じがして、それもやっぱりね、まあ4年生を僕がやったからってことですかね（笑）

一同 （笑）

高橋 西沢さんと百田さんと僕が上手かったんでしょね。組み合わせとして（笑）いやでもやっぱりそれは冗談として、今の4年生がね、しぶといからですよ。しぶといんだよ、君たちなかなか。しぶとく熱気がある。

底力のある学年

高橋 卒業設計の総評？毎年難しいんだよな。10000㎡を非常勤として見ているので**10000㎡の方が良かったかな**というのは正直なところある。10000㎡と同じテーマの人は10000㎡の方が良かった気がするんだよ。そこから面白く発展したなっていう人はどうだろう…。あ、宮本くんとかは発展したのかな、規模が大きくなってね。あんまりでも変わってない…。あ、西尾くんなんか結構変わったよね。上田君も結構変わったよね。河野さんもだいぶ洗練されて。だからそういう意味では全員が全員そうでもない。結構ちゃんと発展させられた人もいたと思うんですけど。去年の春～夏にかけて考えていたことを秋・冬で温められた人と、よくわからないまま進んじゃった人がいるってことですかね。そこはちょっと気になったかな。自分のアイデアとか考えていることを自分の好奇心によって進ませていけるのかどうか。これはいろんな人の手助けを必要とするので、エスキスの受け方とか中間講評の受け方とか、そういうこともきつと作用していると思うんですけど。いろんな人にアドバイスをもらって、迷っちゃったのか、自分の信念を貫けなかったりすると情性でいってしまうだろうし。あくまで自分は自分ということをやれた人は面白くできた。あと面白くしたいっていう野心がある人は面白くできたんだろうなっていう感じがな。そういう意味では割とそれぞれの人の人間性、個性が出たという風には言えると思いますよ。逆に10000㎡であんまりうまくいかなかった人は卒業設計でもあんまり上手くたって

ない。だからそこはちょっと…。10000㎡で何かつかなんで欲しいとは思いますがね。総評っていうとそのくらいしかないかな。この総評聞いて何か的外れなこと言ってるなっていう人もいるだろうし、自分はそうは思いたくないって人もいるでしょうから、だから総評ってあんまりいらなかな（笑）

世代、学年の雰囲気ということを総評に変えられるような気がして。それは結構印象の強い学年の人たちなんですけど。特に男が元気！男が元気だねえ。男が元気なのはすごく僕にとっては希望ですね。まあ「女性が」、「男性が」っていうのも今はもうあんまりふさわしくないと思うんだけど、最近の5、6年はね、割と如実に女性が随分一生懸命に設計をやっていた印象が…。印象というか実際そうだったと思うんですよ。それがこの代になってからは負けじと男が根強くやるのはいいなあと思うけど。そういう意味では本当に男性と女性が等しく建築をやっているのかなという感じ。女の人にもパワフルな人がいっぱいいるし。男の人にもパワフルな人がいる。皆さん都市科学部ですか？

石川 ぼくたちの代からです。

高橋 じゃあそういうのも影響しているのかもね。なんか底力というのを感じた。上の学年の人達には悪いけど（笑）

一同 （笑）

高橋 今年の4年生には**やっぱり下地っていうものを感じる**よね。**教養とか**。「ああきつと勉強してきたんだろうなこの人達」っていう印象ってあるんだよ。ね。

学歴が全てとは全く思わないけど、高校しか出ていない人と、大学出ている人と、大学院出ている人ってやっぱり大人になっても、どうしても顔つきとかものの考え方に出るんだよ。物事の諦め方にも結構出る。スパッと辞める時にね…。結構出ちゃうの。そういう意味でもね、今年の4年生はそういうものがある。多分受験勉強一生懸命やってきた人たちが多いのかなあとか。AOの人でも結構本気で受験するつもりで、高校の時の模擬試験とかの締切と戦ってきた人が多いんだろうなって感じがして。そういう**底力的なポテンシャルを感じる学年**だったかな。それがちょっと失礼なことだったら皆さんに申し訳ないんですけど。ただ「学年の雰囲気は？」って聞かれちゃうと、そういう違いは結構明らかに感じた。坂田くんとかね、いい加減そうだけだよ。まあ設計上手くないかもしれないんだけど、なんか下地っていうのはすごくしっかりしているよね。勅使河原くんとかさ、ああいう特に成果物としてはたくさん出てこないとしても、地はしっかりしているというか、考えていることは矛盾がない。「なんでそういうことをあなたは考えるの？」って問いかけた時に、やっぱりちゃんと理路整然に説明する力がみんなあるよね。それは意外となかなか今までなかったと思う（笑）

だからそういう意味では、結構ちゃんと高校の時もしっかり勉強して、本とかが読んでいるなっていう印象はある。東大の滑り止めとかで横国入ってきてる人もいっぱいいるのかなとかさ（笑）

落葉樹ではいいよね

亀井 固いねとか真面目だねって言われることに繋がっているんですね。頭が柔らかくないみたいな。

高橋 そうだね。でもね、頑固とは思わない。わりかし柔軟だけど頭が良すぎて、足取りが重いっていう感じ。考えすぎちゃって、悩みすぎて足取りが重くなるっていう。だからもうちょっと**バカになる練習をする**といいかもねえ。

亀井 それずっと言われてるなあって思います、この代。

高橋 そうだっけ（笑）バカになる練習をするといいよ。もともと地頭のある人はね、バカをやるとなかなか良いものが出ると思いますよ。バカって要するに先入観を捨てる、勉強してきたんだけど、その内容を忘れる。忘れるんだけど、精神性っていうのは残るわけよ、そういう人達っていうのは。スピリットっていうのは、どうしたって残るのよ、性格とか。生まれた後でやってきた積み重ねっていうのは、後天的に人間性

と生活と能力に影響すると思うんですよ。生まれつき頭が良くなくても、もしくは天才でも。だから、やっぱり高校までの勉強量がしっかりしていると、バカもやれるっていうことかなって。そのバカをやるっていう時に、勉強したものを全部忘れる、もしくは経験したことを全て一からやり直すということ。忘れるのって結構大変なんですよ。忘れるのって難しくってね、とにかく**人間の能力が一番重要なのが、忘れる能力である**っていうのを三島由紀夫が言ってまして、あ、三島由紀夫僕好きですよ。この忘れるっていうことをコントロールできる能力という風に僕は解釈しました。三島由紀夫って猫が一番好きなの。犬が一番嫌だと。あいつら（犬）は自分がしたこと恩を覚えてるらしい。だから飼い主の顔を一生懸命覚えているか。そういう動物も可愛いけど、猫って自分がしてあげたことを忘れてくれるから何回でも懐いてくる。覚えていると、相手に対して、もう悪いかとか遠慮し

ちゃう、というふうには三島由紀夫が言うわけ。でも忘れてしまうと、人からもらった恩も自分がした恩も、何回でも再現可能だから、人間関係が一番良好な状態で保てるっていう論理展開だった。それが面白くてね。

坂田 すごい意外ですね。三島由紀夫ってすごい構成がしっかりしていて、最初から最後まで落ちがあるといううなすごい綺麗なイメージがありますが、その彼が全部投げ捨てていちいちやっているっていうのが面白い。

高橋 だからそうは言ったって芯がやっぱり残るんだよ。葉っぱや細かい枝は全部無くなる。樹木みたいなものかもしれないね。冬になると葉っぱが全部落ちちゃって幹の形と樹形が残るんだけど、また春になると芽が出て、緑になって、紅葉して落ちるみたいな感じに近いのかな。まあ要するに落葉でありなさいってことかもね。よくわかんなくなっちゃったよ。

一同 （笑）

知性と感性の共存

石川　あと、建築を学ぶにつれて、素直さから離れていくその二つをどう共存させるのか、というのが事前に出ていたんですけど。

高橋　建築を学ぶにつれて素直さから離れていく…

寺西　それでもしかしたら今の話なのかなと。

高橋　ほう、なるほど。

寺西　**勉強しすぎちゃって、そっちに凝り固まっちゃっていきような感覚と、そうしていくと感性とか素直さがどンドンどンドン削がれているんじゃないかって心配になる。**

高橋　ああ、なるほど。寺西さんらしい悩みだね、それは。真面目少女の悩みですね。

寺西　（笑）真面目なんですかね。

高橋　うーん、でもね、それはね僕も抱えましたね。真面目少年でしたからね（笑）

一同　（笑）

高橋　いやぁ、そうなんだよ本当に。だから共存っていうとちょっと難しくなるんですけど…。**やっぱり共存させるためには忘れること**、ですかね。忘れるには生活習慣をちゃんとしたほうがいいですよ。まずよく寝ることですね。最低ね、6時間、7時間、8時間は寝たほうがいい。寝るとね、忘れるから。忘れるくせして記憶が定着するんです。だから睡眠って僕一番いいと思う。僕は寝るの好きですね。

寺西　今年の卒制期間は15時半にいつもスタジオを追い出されてたので、自然と生活リズム良かったです。

高橋　ああ、なるほどね。そういうことだけで結果が全然違っちゃうんだよね。だから意外といいんじゃない

高橋さんの学生時代

石川　高橋さんはどんな大学生だったんですか？

高橋　僕はとにかく昼寝はよくしましたね。昼寝はよくしてて、よく遊んでましたよ。女子と会ってるか建築見てるかじゃない？（笑）若いから。（大笑）

坂田　建築は見てたんですか？

高橋　建築みたりとか、あの、本読んだりとか、後はまあ、アルバイトとか、してた。うん。建築はよく見に行ってたね。青春18切符とかあるから。

坂田　でもその間もちろん、製図室とかで作業もしてたわけですよね？

高橋　製図室ねえ、僕は製図室好きじゃなかったんでねえ、行きませんでしたね。

坂田　なんで好きじゃなかったんですか？

高橋　あのね、うーん。あくまで僕の問題なんですけど、周りの人ががんばっているところに居たくないの。これはもしかしたら共感する人いるかもしれない。

亀井　そこちょっと深く聞きたい、なんか、なんか、うんって思いました。

高橋　あそう、皆頑張っているところで、自分がやりたくないの。集中できないから。ライバル心が激しくあるのかもしれない。今も大人になると建築家ってい

い、このやり方（笑）　あとはやっぱり気分転換になるようなことを自分でちゃんと見つけることができる能力は大事。なんでもいいんですよ、食べるとか、寝るとか、まあ好きな人と交流するとかでもいいし、なんでもいいんですよ。あと、これをやるとなんか頭がリセットされるなっていうことってあると思うんです。たばことかはやめたほうがいいと思うけどね、あと酒も。僕はね、僕は昔たばこを一日48本吸ってね、酒とかワインを一日一本飲んでたんですけどやめたほうがいいね、絶対やめたほうがいいですよ。

一同　（笑）

高橋　コロナとか肺って一度壊れると治らないんだって。だから僕はコロナ怖い。なったら死ぬかもとか。リフレッシュっていうとちょっと安っぽいけど、気分転換っていうのを、月並みですけど、朝を迎えることですかね、端的に言えば。1日のうちにもし3回朝がきたら、朝って捗るじゃん、何が捗るって、手が動くっていうことよりも、頭が整理されるんだよね。例えば僕はもう最近原稿を書く量が一気に増えちゃって、新建築で毎月3000文字ぐらい決まった文章書かされるんですよ。そんなものは僕は朝やるんですけど、朝書くとね、あの夜中に書くよりも迷惑にならない文章が書ける。迷惑にならないっていうのは、その人にとって言いつぎない、そこまで言われたくないとか、メールとかもそうだと思う。夜とかに打つと、ろくなことないよね。それは朝見返すとなんでこんなこと書いちゃったんだろうとか、例えば怒っているときとか、相手に意見を言いたい時とか、皆さんも経験あると思

うんですけど、夜より朝の方がいいと思う。とりあえずまあこれはいいかな、これもいいや、まあいいや、もういいやということで、本当に大事なこと、言いたいことっていうのが絞られるのは朝だと思う。もしくは、お風呂に入った後とかでもいい。やっぱりずっと頭で考えているとヒステリック状態になるから、それをリセットする。それは設計している時にも起きるんだよね。例えば1日24時間じゃなくて1日8時間ぐらいにして、3回ぐらい起きられるといいのかなあと。思って。昼寝を最低1回するとか（笑）　そういうようなことを思うけどねえ。よく寝るっていうかよく切り替えるっていうこと。製図室にずっといても捗らないと思う。そうでしょう？仕事になってくと段々そうでもなくなっちゃうんだけどね、目の前のことにどンドン追い込まれていって、大変なんですけどね。まあ今のうちは、そういう習慣を持って。後は、2つのことを常に考えておくこと。学んだことと素直な感覚というのは常に考えておく。ぼーっとしていても、ふと言われたら頭を起動できるような状態に常しておく。それにはやっぱり本がいいと思う。文章を読むのが1番いいと思う。ネットの文章はダメだ、良くないと思う。論理がないから。やっぱりちょっと難しい本を読んだほうがいいと思う。頭が起きるから。その習慣が学生の時にあったら、僕はもっと違ったなぁと思う（笑）

坂田　なかったんですか？

高橋　なかったね。やっときゃよかったなあって思う。忘れるってことはよくやっていた。



馬場一輝 『まちの資源が集まる、子どもたちの居場所』3年後期　こどもセンター

空間から環境へ

坂田　じゃあ4年間で溜まった他の疑問ですか？それぞれの人の。（質問リストを見せる）

高橋　建築で環境を作れ？

馬場　こどもセンターの時に言われたんですけど。覚えてますかね？（笑）

高橋　こどもセンターの時に言ったなあ。どんなシチュエーションどんな文脈だったっけ？

馬場　建築の中で完結しているものを持っていって、それでなんか一つ一つの問題には対処するような建築を作ったんですけど。中で閉じていて商店街にあんまり影響及ぼしていないようなもの作って。これです。

高橋　文脈的に建築で空間を作るんじゃないくて、環境を作ったほうがいいってことを言ったのかな？

馬場　これの途中のエスキスの時に環境を作れって言われて。

高橋　あ一言った言った。ただ、これ最終案では環境を作るうとしてるんじゃない？

馬場　はい。最終的には、目指しました。

高橋　うん、そうだよネ。環境ができてるんじゃない？じゃあ別にいいんじゃないか？（笑）　それが伝わってるんだから。

馬場　自分なりに、どういうことだったのかなっていうのをずっと考えてやってきたつもりだったんですけど。それが高橋さんのにはどういう解釈で考えているのかが気になって。

高橋　それを言った時の意図は今の建築論とつながっていて、変わってなくて。**建築空間**ってあるじゃないですか。壁と天井と床で囲まれた、例えばキリスト教会の場合は、天井とか屋根を高くするじゃない。屋根を高くすると神に近づいたような気がするってことで高くしているのか、あるいは光を上の方から入れて、神の存在を感じようとしているのか、神が来た感じがするように作った歴史なのか。さらに装飾をして、神を称えて、それを迎えるというような、**はっきりとした目的があるときに空間っていうものは役に立つ。だけど、今はそうじゃないのではない**か、っていうことを思ってきた。例えば、リビングルームとか、交流室とか、体育館というのは目的をはっきりさせている。小学生は教室なんかにいるより体育館の方にいたいと思うかもしれない。だけど、「体育館は勉強する場所じゃないよ」って言われるわけ。体育館と教室を同時に作るから、体育館という建築のつくりが勉強する場所じゃないよって言っちゃうんだよね。子どものためというよりは大人が子どもを管理しやすくするために作るから、空間の目的も強くなる。結局**建築というものは何を作っていたのか**という**と、機能とか目的を明らかに意図して、それが誰でもわかるような空間を作ってきた、というのが僕の解釈。それに対して人間はさ、その通りにはやりたくない**わけ。実際に勉強したくなるっていう、一方でそうでもないこともある。飛躍するんだけど、そこで**環境というものを作っておくことが大事**んじゃないか。**環境の変化を作ることができれば、人間は反応できます**から。そこに希望を見出した方がいいんじゃないか。つまり、**空間を作って、「ここで何かをしなさい」というのではなくて、良い環境を作っておいて、何かしなくなるという状態を作って、そっちの方に賭けたほうが、人間の自由につながるのではない**か。そういう建築を作ったほうが面白いのかなって。それは**人間が動物として人間らしく生きることができるところのために建築というのがあってほしい**から。だって古代ギリシャとか、ローマの時代は、一応人間のために建築は作られていた。人間が神を信じて神に祈るために。地球が回っているのか、太陽が回っているのかわからないような時代、神は本当にいるのかわからないような時代に作っているから、それはある意味人間のために作っている。それがある時どこかの時代でそうではなくなっていくわけだと思うんですよ。

フィードバックが想像力を奪う

高橋　**フィードバックをしちゃったがために目的を限定することにもなっちゃった**。これは非常に哲学的な展開なんだけど、これはハイデガーが80年代に予言していたことで、フィードバックはいわゆるAIのモデルなんです。要するに、経験則でこれをやるとあれが起こるから、それを先読みしてこれを作っておくという考え方。アマゾンで本を買うと、この本を買った人はこの本も読んでいます、買ったらどうですかというような感じで商売に使われたり、もしくは道案内に使われたり、役所の公共サービスとかに使われたりする。それがAIですよ。これをやっちゃうと人間は常に縛られる。ビッグデータというのがあるんですよ。人間の行動を全部集めて、大体の傾向がデータ化できている。そのリサーチを活かすことで、人間はより便利になるっていう思想にもつながるんだけど、果たしてそれは人間にとって良い展開なのか、それを考えなければいけないときが来たと思うんです。ハイデガーはそれを予言していた。その時代が来るときっていうのは、西洋哲学の完結だと言っている。西洋哲学はソクラテスなどに遡って、ヨーロッパ人が自然を征服していく歴史、もしくは、自然とか宇宙を理解していく歴史。そこで人間にできることは、知恵を使って技術というものを生み出すということであって、その技術を応用していくこと。ハイデガーがサイバネティクスって言って、コンピュータの力で演算をすること、フィードバックの原理、それも自然科学の理想ですが、その力によって、適切な答えと適切な正しさというものを作り、人間に自信を持たせる。神がいなくても自分が正当化できる。ちょっと言い過ぎかもしれないけど、そういうような

もの。そこまでやっちゃったら、その先を想像できないでしょ？だから西洋哲学の終焉、もしくは西洋哲学の完結って言われるんだけど、これはもう空間の歴史でもあるんだよ。それじゃあ次はなんだろう。とっくにそんな時代は終わっていて、今は**哲学の世界ではアジア史が注目されている**。仏教とかの哲学で、あちは哲学って言わない。儒教がもう哲学。そういうところに行くと、東洋の哲学体系と西洋の哲学体系は全然違う。そもそも西と東の境界って存在しないと思いますが、一応僕はその東洋のほうにかけている。日本人でもありますし、僕もハイデガーと同じく**科学の追求とサイバネティクス、もしくはAIのオートマティックなものが、人間の想像力を潰すのではないか**という恐れを感じる。**全部が自動化して便利になった分、人間は煩わしいことから逃れたかわりに物事を考えているのかと多く考えていない**。頭は空っぽ。むしろ本も読まないで、ネット記事とかInstagramとかFacebook見て、馬鹿になっていだけだよ。全部情報垂れ流して、右から左へということでもいいのっていうのはあるので、この**環境を作りなさい**というのは人間を目覚めさせる、**覚醒させるという意図がある**。そういうことですね。

質問の多い問いへの好奇心

高橋　動物に最近興味があってね、今、仕事で動物のプロジェクトをやっていて、動物の歴史をずっと本で読んでいる。ヨーロッパ独特の価値観、それからアジア独特の価値観は動物に対しても分かれていて。ヨーロッパ人は、動物が機械だって言い切っていた。なかにはそんなことはない、動物にだって魂があるし、一緒にいれば感情もきつとあるって言う人もいるんだけど、基本、動物機械論っていうのがありまして、動物はマシーンだと。昆虫は精密機械だと捉えていた時代なんかもあって、そういうところにもあらわれてくる。でも結局、人間の根源というのは、追求しても答えは見つからないんですけど。ただ、そういう**見つからないことに対して諦めるのではなくて、好奇心を持ち続けていくことは重要だ**と思う。実際、キリスト教は終わるかといったら終わらないんだよね。神なんてないかもねって、みんなどっかで思っているけど、自分が不幸に立ち向かうときには、教会とか神社に行っている可能性がある。これは一人の力、自分自身の力で緩和させたり、解決させたりしようと人間は多分思っていない。例えば、誰か身近な人が死んじやったときに、一人では乗り越えられないかもしれないし、災害があって多くの人が死んだときに、自分の知識とAIは信用できなくなるのでは。そこはやっぱりあると思うんです。

人間の感性は何かしら宇宙全体に行き渡っているからだと思うんですよ。**感性、想像の対象はやっぱり重要なことですよ**。そういうものと**建築が関わるのか**どうかってことをやっぱり追求した方がいいと思う。なので、そういうことを言っている。

坂田　先ほど人間のために作っていたっていうのがフィードバックのために作っていたっていうように流れが変わって行って、それ自体が空間の歴史っていう話だった。

高橋　ちょっと大雑把ですけどね。乱暴なまとめ方ですけど。

坂田　**じゃあ人間のために作っていたというのは、神がいるかないか分からないから、とりあえず、教会を建てるといことですか。**

高橋　そうかもしれない。とにかく**やり場のないこの気持ちをどうしよう**かってことでやり方がいろいろ違う。横浜国大のすごい上のもう亡くなった先生で井上充夫さんっていう建築史家がいまして、その人の本すごい面白いよ。そのやり場のない感情をね、韓国では、中国では、中東では、みんな異質なんだって。塔や塚を使ったり、みんなやってることは同じなんだけど、出てくるモードが全部国ごとに違う。これはめちゃくちゃ面白い。

寺西　『建築美論の歩み』って本ですか？

高橋　そうそう、『建築美論の歩み』、それから『建築美の世界』。

坂田　それって塚とか洞窟とか建築の原型をどんどん並べていくような。

高橋　あとは、安心したところで動物から襲われないように砂漠で寝たいとか、そういうことで昔の集落ができてきたりさ。

坂田　それがフィードバックのために作った空間？

高橋　それがさ、どんどん進化していくじゃない。そこで技術っていうものが出てくるんだけど、そこでまた人間が増えて大多数っていう問題が生まれる。そうすると、どこかの段階で強い者と弱い者、富裕層と貧民層っていうのがどうしたってできる。権力を持っている人とそうでない一般市民っていうのが。そうなると、産業革命が起きちゃって、奴隷解放とか、要するに働かされていた弱者たちが出てくる。そういうふうになると、平等化が起きてきて、これは近代の歴史とも重なるんだけど、人間が等しく何かの恩恵を受けるためにはどうしたらいいか、そこで商売が発達してきて、物々交換が発達してきて、いろんな人が食うためにお金が必要だったり、も

のが必要だったり、食べ物が必要だったりするんですけど、そこをみんながみんな確保することで、よりよくしようと思ってくるんだよ。その技術っていうものを。例えば、火をつけるのに1時間かかってたらかなわんなどと、なんとかならないものかって言って、ガス使ってみたり…。それが結果的に、フィードバックに行き着く。この過程は想像しやすいでしょ？

坂田　より簡単に、より手軽に…。

高橋　要するに、失敗から学ぶっていうこと、平たく言えば。経験から学んで、経験を生かしてやるっていうこと。これってさっき言った、忘れるっていう話と近くて。それをやめた方がいいんじゃないか。文明はこれ以上進んでも仕方ないなと思っていて。でも、もっと進んだら何が起るのかっていうのは興味あるんですけどね…。国際キリスト教大学を出た坂田くんなんかはどう思うか（笑）　キリスト教っていうのはなくならないでしょ。

坂田　そうですね。

高橋　神を信じ続けるよね。僕は神を信じるタイプではないですけど、何かは信じるよね、きっと。何を信じるのかね。自分だけではないと思うですよ。

本当の建築を信じる

高橋　**何かを信じないと生きられないと思うんですよ**。例えば川とか、山とか、田んぼとか実家の風景とかなんでもいいと思うんですけど。何かしらがあるから、生き延びている、生きようとしていると思うんです。**その根拠に建築があったらすごいことじゃないか**ということでもある。例えばアパートを探すことがあると思うんだけど、おしゃれなアパートだけ集めたサイトがあると思うんだけど、あれを見ると、自分は横浜に住みたいんだけど、なんだこんなどに素敵なところがあるならそこから通って、横浜に通うのも苦じゃないと思う、それってのはやっぱりさ、建築や環境の問題が関わるんだよ。生活に。あるいは自分が信じていたものが、他所から指摘されて、その環境に気づいて、自分がそこへ行きたいって思うことで自分の行動範囲が変わる。一級建築士取れとか、くだらないこととかはどうでもいいんだよ。建築学科がやることはそういうことなんだよね。それが当たり前すぎるんだけど、言う人があまりにもいなさすぎるから、僕がこんなところでしゃべんなきゃいけない。

建築の歴史と現代の建築

高橋　**何かを信じないと生きられないと思うんですよ**。例えば川とか、山とか、田んぼとか実家の風景とかなんでもいいと思うんですけど。何かしらがあるから、生き延びている、生きようとしていると思うんです。**その根拠に建築があったらすごいことじゃないか**ということでもある。例えばアパートを探すことがあると思うんだけど、おしゃれなアパートだけ集めたサイトがあると思うんだけど、あれを見ると、自分は横浜に住みたいんだけど、なんだこんなどに素敵なところがあるならそこから通って、横浜に通うのも苦じゃないと思う、それってのはやっぱりさ、建築や環境の問題が関わるんだよ。生活に。あるいは自分が信じていたものが、他所から指摘されて、その環境に気づいて、自分がそこへ行きたいって思うことで自分の行動範囲が変わる。一級建築士取れとか、くだらないこととかはどうでもいいんだよ。建築学科がやることはそういうことなんだよね。それが当たり前すぎるんだけど、言う人があまりにもいなさすぎるから、僕がこんなところでしゃべんなきゃいけない。

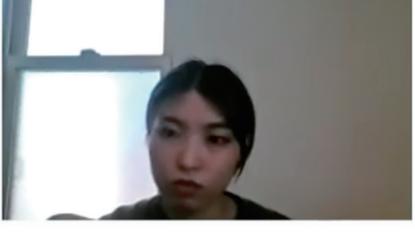
高橋　横国はそういうことだと思いますけど。そこまでの想像力がある。あるというか、そういう方向でのを考えている人だと思う。

寺西　横国で建築がそういうものって教えられたけど、多分実際入ってから知るっていう部分もあると思うし、親とか周りの人は、大学に資格の取り方を学びに行っていると思っている部分は少ないなと思っているんですけど、もう一個気になるのが、全然関わったこととか行ったことないから分からないんですけど、そもそも建築への理解とか芸術への理解のレベルが高いと言われてる国とかあるじゃないですか、ヨーロッパとか、何が違うんですかね？

高橋　やっぱり、環境じゃないかな。家とか壊さないじゃん、ヨーロッパはさ。日本はすぐ壊して、捨てて、また建ててってなるじゃない。でもそういう日本人の中でもお婆あちゃんがずっと住んでいた家に今も住んでいますというのはやっぱり深みはあるよね。そういう違いが何千年と蓄積されると、やっぱなっちゃうかな。そういう意味では、日本人は忘れやすい、忘れるのが簡単な動物なのかなっていう感じもするけど（笑）　だから、これ以上ヨーロッパの影響を受けなくて欲しいよね。欧米のそういう哲学の影響を受けてもいいけど、それはもう完結したよっているんところで伝えなくてはいけない。

寺西　ヨーロッパの影響を忘れて、アジアを考えるみたいな…。

高橋　アジアもすぐ汚染されるからね。結局西洋に対して劣等感があるでしょ。西洋はファッションとかオシャレに見えるじゃない、洋服なんかもさ。あっちの方がいいなって思っちゃんだよ。日本史なんかも読んだり調べていたりするとさ、伊藤博文が明治の開国の時の交渉で、日本人が袴でドイツに行ったら、あっちの人たちがあまりにカッコ良すぎて。背は高いわ、鼻高いわ、自分に対して劣等感しかなさすぎて、背も低いし。でね、うっかりハンコ押しして帰ってきちゃった、なんらかの条約に。そういうものじゃない、やっぱ。イブサンローランの服とか着たいじゃん。そう思うでしょ。オシャレだなって思っちゃうんだよ。自分のところのないものだから、そう思っちゃう。ヨーロッパの中には感覚の鋭い人はいて、日本の着物をあえて着る人もいるけど、基本、ヨーロッパっていうのはヨーロッパの歴史イコール世界の歴史、地球の歴史って日本も植え付けちゃってるから。ユダヤとかヨーロッパの人たちは、自分の歴史は世界、宇宙の歴史って確信しているようなところがあるから、そういうとこに留学に行ったり、来たりすると、本当にそれでいいのってっていうのが、アジア人にとってはずっと疑問に思うと思うんだよ。



近代のない中国・近代は重要ではない？

坂田　高橋さんはインスタに客家土楼をあげていたじゃないですか。東洋の建築的なインスピレーションみたいなのはあるんですか？

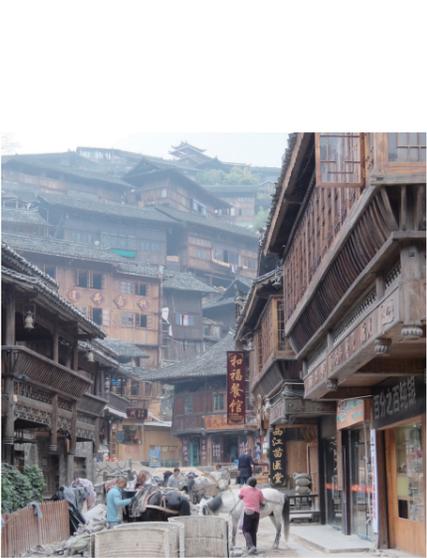
高橋　中国はね、ここ6年連続正月に好きなところに行っていたの。4日間か5日間くらい。そこは仕事のついであっていうわけにはいかないところだから、自分で旅行として行くしかない。元旦に飛行機乗って。別に中国の建築をパクろうとかいうんじゃないんだ。どっちかというと、人間を見に行く、人間の知恵の現れ方を見に行くってことなのかなと。中国の人たちは近代化されていないところって結構あるんだよ。中国は未だに近代化しようとしている。習近平によって。中小都市にパンパン超高層のマンション建てて、サービス業とかやらせているけど、中国は人が多すぎて、奥行きがあるから、海に面しているところから5000km、一番奥だとチベットぐらいのところまですごい奥行きがあって、奥行きを感じさせる川があるわけ、揚子江と長江とかが。それで、上流の方に住んでいる人は近代化の煽りを受けない。面白いのは、現代の煽りは受けている。スマートフォンは持っているのに、言葉が話せない。それで面白いと思って通い続けることになった。それで、そういう人たちが建ててきた何千年前、何百年前の建築を見たり。特に家とか、畑とか。一方で電気自動車なんかがむしるあるわけですよ。近代化がないので、ガソリンの車はないの。有線、コードの電話はなくて、携帯は持っている。Wi-Fiは飛んでいるけどインフラがない。

坂田　どうやって充電しているんでしょうね？

高橋　そうそう、だからWi-Fiの充電なんて彼らにとっては魔法みたいなものでさ、ほら、原始人にライター渡したらどうなるのみたいな冗談昔あったと思うけど、本当にそんな感じの場所が奥地って結構あるっぽくて、それが面白すぎちゃって、みんなあっちの中国人は庭先に出て、鶏潰して食べたり、庭でトランプとか、お湯に足突っ込んで温まりながら携帯ずーっと見てるの。面白いんだよ。あそこの人たちって。勉強はしないのに世界を悟ってしまう。想像力と情報によって。これはね、なかなかすごい人たちがいるんだと



思った。これは日本みたいに等しく教育させた国には到底起きえない状況なのよね。もしかしたら僕の仮説によると、あと10年したらまた仮説が変わると思うんだけど、**近代の歴史は、あんま重要じゃないんじゃない**かって思い始めている。人口が増えて、要するに日本の明治維新から今ぐらいまでっていうじゃないかっていう感じが。長い世界史にとって、「大変な時代だったねー」って後から思われちゃう数百年となるのではないか。例えば南北朝時代とか戦国時代みたいな、「あー大変だったなー、まあ偉い人もいたんだろうな、でも確かにその時代に生きるの嫌だな」って何百年後ぐらいに思われちゃうような時代なんじゃないかっていう。要するに「こんなコンクリートのビルのゴミばっか作って、どうしてくれるんだよ、何百年前の人たちはそのおかげで水も今や出ないわ、ガスも出ないわ、おいどうすんのよ、太陽の光を浴びるしかないんじゃないか」とか。そういうような時で来るかもしれない。そういう時代に今いたとすると、今をどう必死に生きるのかを考えるよね。その時に、**中国の奥地は近代が抜けているの**。そうすると世界の歴史が、太古の歴史から古代、中世、近世、現代に行くんだよ、近代抜いて。そうすると、**人間的な歴史がずーっとつながっていくような感じがする**んだよね、そこに行くとか。それが新鮮で。まあでも結局そうは言っても、目をつけちゃう人がいて、昔のそういう古い街とかを一括して世界遺産とかにしちゃってさ、リゾートビジネスやって、地元の人ってのは擦れてないから騙されちゃって、民族衣装着せられて踊れとか言われて観光収入になる。当事者としても「美味しいもの食べられちゃうからまあいいや」ってことになって。「農業確かに大変だったしな」ってことで、そういう観光業に走っちゃったりする人結構出てきていて、残念な世界遺産もたくさん見たんだけど。だけどやっぱりそういうところの源を見るのは面白い。どんどん危険な場所になっていくんだけどね、最近は。前行こうと思って断念したのはね、崖の上に住んでいる民族がいるらしくて、800mの崖の上に住んでいて、下に学校があるから、朝と夜、鎖で岩を繋いであって、鎖の命綱で登



校する。それで、崖の下に通学する。一応死人って出たことない。800m下の崖よ。それで見かねて、中国のどっかの町が、そこに梯子をかけてあげるっていう公共事業を、面白いじゃん、それが公共事業なんだから、崖に梯子をかけるっていう。鉄パイプでそれを組んでやっているってのがあって、それを見に行きたいなっていう。でも、奥すぎてね、奥地すぎて中国人も知らない。なんかそういうところがいっぱいある。客家土楼なんてのは、そこからすると大したことない。もうみんな知っているし、観光地化されたりしているから。客家土楼の中でもあんまりガチガチに観光地になっているところはあまり行かなかった。だからインスタにあげているのは意外と素朴なところが多いですよ。ただの廃墟みたいな。

坂田　商業的になるとつまらないことも多いですよ。

高橋　そうそう、結局客家土楼入ってどんな生活しているんだろうと思ったら、全部お土産屋だったとか。そういうのもあるんですよ。全部ホテルできれいになっちゃっていたりとかあるんだけど、中にはね、家で、普通に泊めてくれる家なんかもあって、僕は泊まらなかったけどね、さすがに。トイレとかが超原始的すぎて、ちょっと無理だったね。残念だったんだけど。

坂田　行かないんですか？そこまで行って（笑）

高橋　いやーだってバケツにしなさいって言うわけ。で、外の廊下に置いてあるの、みんな。その家は。それをバケツにたまたたら、畑の肥料にするっていうのでやっているんだけど、廊下がまあすごい匂いなんですよ。そこ泊まるのはちょっと無理だなと思って流石に。800年前ぐらいの建物ですよ。でも、ほとんど空き家みたいですけどね。土楼を残しておいて、その周りにコンクリートの街ができてちゃって、まあ世界はどこも一緒なんだけど、いわゆる旧市街と新市街っていうのがやっぱりあって、旧市街の方は歴史的価値があるから、リノベーションもしないで残して観光業をしよう。そういうのがあるんですよ。

ルネサンスを建築で起こす

石川　高橋さんが今建築をやっていく上でのモチベーション、目指していくものは何ですか？

高橋　それはざっき話したようなことじゃないですかね。

石川　環境を作りたい…？

高橋　環境を作るであるとか、あとは人間を覚醒させるって話、その辺なんじゃないか。そこに建築がどう関わるかって話とか。**人間性の復権**と言ったらただのルネサンスと一緒にからな…。ルネサンスの時に人間性の復権ってなんで言ったんだろうね。それはずっと謎。それまで人間は見捨てられていたのか。神ばっか



学生のうちに何をするか？

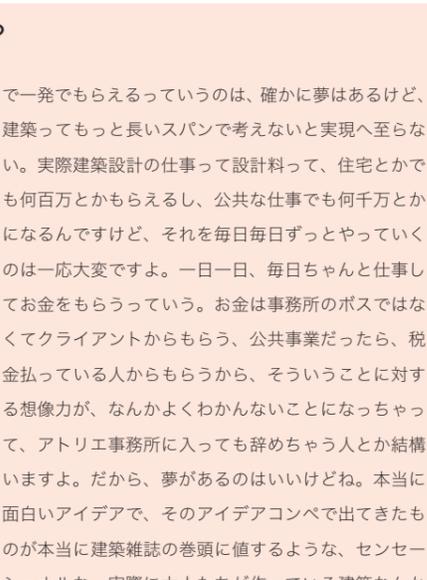
坂田　コンペ、賞レースについてどう思っているか。それをやることの価値について。

高橋　そうねえ。学生の時の賞ってあんまり役に立ってないと思う。卒業設計の吉原賞くらいじゃないかな。河野さんが持ってったけど。あとJIAの金賞銀賞とか？ああいうようなのがいいんじゃない？あんま企業主催のコンペとかやらない方がいいよ。僕はそう思いましたけどね。特に最近の新建築の学生のコンペとか出ているんだけどまあロクなのがない、面白くないっていうか。なんかの焼き直しみたいなのをA1の絵にしてさ。審査員の方もコメントがもう茶番だらけじゃない。この人の考え方は新鮮だとかテキトーなこと書いててさ。まあそれで企業のおっさんが「まあよかった」って言って、節税対策で何百万学生にばら撒く、本当に無意味なことやってんなって思う。で、それを新建築の月評に書いたらカットされちゃって（笑）

一同（笑）高橋　不毛だよね。お金の稼ぎ方としても良くないと思う。そういうちょっと絵を描いて百万もらうみたいなのがって現代の学生にとってはよくないと思う。そういう風にすると、後で大人になってから苦労すると思う。将来独立して建築家になるうと思った時とか、子どもができて育てたくなった時とか。要するに、所得が少ないという時に、どういう行動をとるとクリエイティブに面白くできるかっていうことを考えるのが一番面白いことでもあるんですけど。そういうときに簡単に百万取れるっていうのがね、迂闊な大人を生み出すだけかなっていう感じがしますけどね。だって百万稼ぐのに君たちが今やってるバイトを一年間くらいやらなきゃダメでしょ？それがさ、建築のアイデア

信じていたのか。だから人間性の復権って言ったのか。どういう風に細かい事情があって、そんなことがルネサンスだっていうのは、どこかで人間が覚醒するんでしょ。今後ルネサンスっていうものが地球で起きるのか。それは東京オリンピックでは到底無理だから。一人ひとりの人間が炸裂する。炸裂っていうと北斗の拳とかそういう感じを想像しちゃうかもしれないけど、元々は自己が、あまりに欲望と意志が強くて、表に発現してしまって、周りに影響を与えるようになっていく状態のことを炸裂って言らしいんだけど。

坂田　なんか建築家みたいですね。藤原さんとか高橋



で一発でもらえるっていうのは、確かに夢はあるけど、建築ってもっと長いスパンで考えないと実現へ至らない。実際建築設計の仕事って設計料って、住宅とかでも何百万とかもらえるし、公共な仕事でも何千万とかになるんですけど、それを毎日毎日ずつとやっていくのは一応大変ですよ。一日一日、毎日ちゃんと仕事してお金をもらうっていう。お金は事務所のポスではなくてクライアントからもらう、公共事業だったら、税金払っている人からもらうから、そういうことに対する想像力が、なんかよくわかんないことになっちゃって、アトリエ事務所に入っても辞めちゃう人とか結構いますよ。だから、夢があるのはいいけどね。本当に面白いアイデアで、そのアイデアコンペで出てきたものが本当に建築雑誌の巻頭に値するような、センセーショナルな、実際に大人たちが作っている建築なんか吹き飛ばようなものならいいんだけど。今ないよねそういうのって。まあやりづらい時なのかもしれないけどね。昔僕が学生の時には、そういうのがちょっとあったけどね、多少。でも今はない。あとアイデアコンペで成功してる人って大体建築やっても上手くいってる人あまり見たことない。（笑）

一同（笑）高橋　僕も昔学生の時、西沢さんの事務所に行って、SANNAの事務所とかも隣にあるから見ているんだけど。今度入ってくる〇〇くんって〇〇コンペの一等と取りまくっていた人なんだよって。どんなやつが入ってくるのかなって思ってたら、意外と一年で辞めていくとか（笑）アイデアを絵にすることには興味が湧いて自信がつくんだけど、実際に建築を三年、五年かけて作っていくことには興味が薄れちゃうとか。結

さんの言葉は自分に炸裂してくる気がするので。

高橋（笑）いや炸裂ってのは主体的なことだよ。炸裂ってのは、発揮するとかそういう程度のことじゃない。もっと自己表出の話なんですよ。例えば何かの化学物質が何かを触媒にしてパンってなる、これが炸裂。だから何かに目覚めて、急に頑張っちゃうとか、これも炸裂。建築学科に入って急に人生面白くなっちゃうとか、そういう建築を通じて世の中を想像することができたりする。



構そういう人が多く出ちゃうんだよね。だから別にこんなのとれなくなつて全然問題ないよ。好きで、情熱

があって、続けていくことの方が大事。

石川　建築家になるには。

高橋　建築家になるにはってというか、別にいらなくてもいいと思うけど（笑）なるためにこれができなきゃいけないなんてことはないと思うよ。だからそういう意味では学生のうちに何をやるかという意味では、何をすべきってことはあまりないんですけど、ところで僕「べき」とっていう言葉があまり好きじゃなくて。「べき」という言葉を使う人とは会話もしたくないですよ（笑）あのね、「べき」なんてことはない。「したほうがいい」というようなことだとすると、なんですかねえ。やっぱり、**ぼーっとして自分の考えをあたためる時間っていうのがある方がいいんじゃないかな**。ほら、旅行とかするとぼーっとできるじゃない。電車とか長い時間乗ったり、飛行機とか、空港とか、ぼーっとできるじゃない。そういう時間をちゃんと持つ。友達と一緒に住んでいる人とか最近多いけど、一人になる時間はあった方がいいんじゃないかな。一人になる時間があれば、孤独というものがなくなる、緩和されると。これ逆説的でしょなんか（笑）一人ではあるけど、**孤独感**は**一人でずーっと物事を考えていると消えて無くなる**。または、緩和されると思う。だから意外と今年の四年生の人たちは一年間コロナで家でずつとやっていたのは意外とよかったかもしれない。一般的には不幸だって思われてるかもしれないけど。意外と良かったんじゃない？

抽象性とは

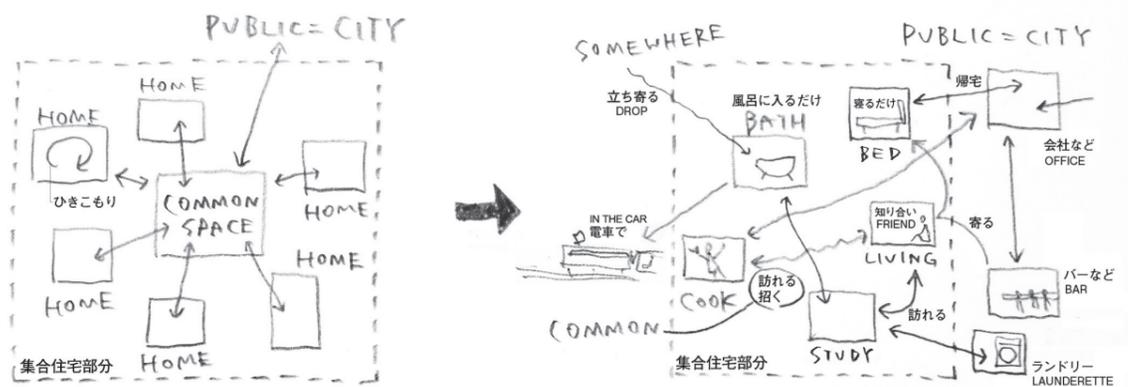
高橋（メモの「君はね、抽象性っていうものをわかってないよ」を見て）これは難しいね。これは大した話じゃないと思う。もう石川くんの場合克服できてると思う。

石川 そうなんですか？でも未だにわかった気はしてないんですけど。

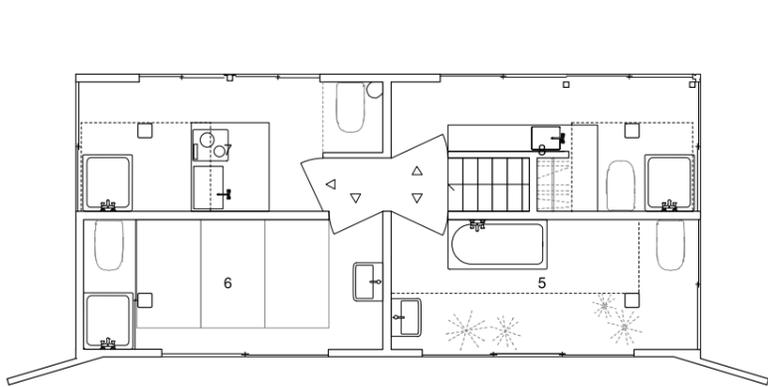
高橋 あー、僕もよくわかんない（笑）ただ、物事を細かく言うか、もしくは簡単に言うかって、バランスの問題があると思う。物事、事実は一つしかないんだけど、それを細かく見るか大體的、大雑把に掴むかっていうことは、ものを考えるときにするじゃん？**大雑把にっていうのは抽象性のもの。細かくっていうのは具体的なもの。いつもその両方を考えるんだけど、抽象性を常に念頭に置いておかないと、自分が結局、何やってるのか、何をやりたいのかを簡単に説明したりとか整理ができない。つまり、自分がやっていることの目的を理解できないまま何かをやることになってし**

まう。**抽象性というものを考えていないと、表現にも行き着かなければ、メッセージを発することもできなくなっちゃう。**そういうことは考えておくことがあるんじゃないかな。だから、例えば空間を白く塗る建築っていうのはこれが抽象的かっていうと、今や様式的だっていうことの方が実は正しいかもしれないけれど、最初に白く塗った人は抽象ってことを考えて白く塗ったんだと思う。つまり、素材の細かい事はとりあえずどうでもいいから、できた内部空間のプロポーションを見てくれとか、できた外側の形の造形の輪郭を見てくれとかということのために、あえて白く塗って細かなことは括弧にくくっている。丸めているって言うてもいいと思うんだけど。見てほしいところだけを言ったり表現したりということになるね、抽象性っていうのは。結局みんな白く塗ったりして、訳の分からないことやってるけど、それは様式化といって、とりあえず白く塗れば、かっこよくなったような気がす

るって、そういうのは良くないことだと思う。だから抽象性を示すことが白く塗るということではない。取捨選択することだって。例えば写真は抽象の世界だよね。そういうような文脈で「抽象性というのを分かっていない」って当時は言ったんだと思う。インスタグラムをやっていると、少なからず抽象性を理解するんだよね。正方形なり決められたプロポーションで世界を映し出すって、そこでもうすでに抽象化は始まっていて、色を綺麗にするのも抽象化が始まる。フィルターをかけるのも抽象化の一つだと思う。ちょっと最近は度が過ぎて、またそれも様式になってきているし。そうならないようにインスタグラムの公式がいるんなフィルターを最近用意しているけどなんか、ちょっと変なものが増えてきたよね。モノクロ写真も抽象化の一つでしょ。というような文脈だったような気がしますけどね。



Diagram



2F / LOWER

平面図 S=1:50

真似できることが建築の面白さ

石川 今まで卒本とかで建築は真似できなきゃいけないっておっしゃっていて。

高橋 真似できなきゃいけない？

石川 タイポロジー。

高橋 ああ、タイポロジーについて、分かった分かった。真似できなきゃいけない、これはどういう文脈だったか。真似できない建築って、面白くないなあって感じがする。ということからだったかもしれない。**真似できるものを作るってことは、遊びを思いつくとか、新しいスポーツをつくるとか、発明的だよね。**真似できない建築というのは、世の中に存在するんだけど、やけに過剰装飾なものとか。これを真似したら、その人のまんまになっちゃうとかあると思う。僕はそういうのは面白いとは思わない。それ自体綺麗なものだし、見に行きたい建築もたくさんあるんだけど、やっぱり自分でもやってみたいと思うようになるじゃん。ほら野球なんて、目の前でやっていたら俺も投げて、バット持って打ちたいみたいな、泳いでいる人いたら自分も水着に履き替えて海に飛び込みたいとかあるじゃない。そういうものを拒絶するんだよね、真似できない建築っというのは。それはやっぱり面白くないなと思う。むしろ**真似できることが建築の面白さ**であるといえる。**真似できないとなるともうそれは芸術でしかなくって、この人すごいなあって、鑑賞することにしかないような感じがする**よね。建築は、ミスなんてのは面白くて、いくらでも大きく、背を高くできて、いくらでも合理的にできちゃう、発明しているよね。鉄骨造とかトラスによってね。コルビュジェなんかも

五原則って言って、この五原則さえ守れば、君も近代建築家だって思えるわけ。面白いじゃん、俺もやってみよう、とりあえず五原則やってみようってなるじゃん。水平連続窓やってみるとか、ピロティだけやってみるとか。でそれを真似しても、お前真似したるとはならないんだよね。それを経た上で違う表現がいくらでも可能なものなんだよね。建っている現代建築も五原則に当てはめたら、意外と全部はまるよ。横長窓とか自由な平面とか、自由な立面とか屋上に庭園がある建築なんていっぱいあるし、一階にピロティがある建築もいっぱいある。そういう原則を作るのが一番決定的じゃない。決定的だし、支配的だし、面白い。例えば、集合住宅をバラバラで作ってみようとか、そういうものだと思う。そういうものを発明するのはすごい大変なんですよね。真似するのは簡単なんですけど、真似できるものを作るってすごいエネルギーがかかる。僕はあんまりやれてないような気がするんですけどね。

石川 でも、アパートメントハウスは、さっきおっしゃっていましたが、集合住宅をバラバラにするのはひとつの原則というか、新しい集合住宅のそれになりうるよな。

高橋 まあ、そうかもしれないけど、計画的なレベルの問題でしょ、それって。

石川 建築としてはではない？

高橋 うん。と、僕は思うけどねえ。自分に厳しく見えています。

石川 なるほど。

高橋 アパートメントハウスが建築的に可能性があるとしたら、僕は柱をわざと邪魔な位置にしていることの方が、僕にとっては大事。

石川 あのでかい（笑）

高橋 うん、なんでこんなところに柱あんのっていうところに。しかもあんな狭い部屋の（笑）狭い部屋なのに、こんなガラス張りでどうすんのかっていうところの方が、建築的な興味がある。それが割と、平面図が奇抜に見えるのかもしれないけど、まず計画学とかで反応しちゃって。その前にこれおかしくないか、間取りが変じゃないかって、みんなそこで興味が止まっちゃうんだけど、実は僕が一番興味があるのはそっち。他の建築家の人に見せたときには、やっぱりそこを言うてくれる人の方が多くて、平田さんとこの前話したけど、奥行きが浅いのが面白いんじゃないかって、言っていたかな。西沢さんに見せたときは、やっぱりこの柱だねとか、この柱無駄に大きくていいねって（笑）鈴木了二さんって建築家は、あの柱の中身も実は使えるんじゃないかって（笑）中がパイプで中空だからって。そこはまだまだだなぁとかって言われてさ（笑）

一同（笑）

高橋 新建築での掲載は、柱が映る写真だけで誌面を構成しようとかって。まあ、柱を邪魔な位置に持って行って、構造原理として成り立たせるっていうのは真似できるかというと、ちょっと難しいかもしれないね。僕独特の職人芸みたいなのがやっぱりどうしても必要で、ちょっとした寸法の5センチ、10センチと

か上手く調整しないと、パフォーマンスされないんだよね。そういう意味では全然ダメなんだけどね。

石川 へえ〜。真似するには難しすぎるっていうこと。高橋 難しすぎるよね〜、やっぱ。SANAAとかでやっている屋根のさ、バラバラしてるのみたいな、適当にやるのとか上手いなあって思うよ。屋根バラバラ。もうみんなやってんだろ？学生の人たち（笑）でも確かに森山邸の時も僕やったんだけどね、集合住宅バラバラにするって。やったんだけど、屋根バラバラっていう方もかなり流行った気もするし。分棟って、古代の建築見ればいっぱいあるし。まあ、屋根バラバラってのも、民家の屋根なんて全部そうなんだけどね。でもそういうとだけを抽象化して、フォーカスしてやっているって時点でタイポロジーになっていく。これ考えた人はすごいんだけど、実は誰でも考えられるという面もあって、それも建築の面白い一面だと思いますけどね。それを履き違えてる人は、これは何かのパクリだとか、そういうふうな目で見たり、所謂オリジナリティっていうことだけに注目している人ってのは、そういうことばかり言う。

石川 うん〜。なるほど。

高橋 だから町屋も、タイポロジーとしては、一階がお店で、奥に人が住んでいるっていう、誰でも使っているアイデアだと思うし、みんな良いと思って、町屋が立ち並ぶ街道なんかが出来るってのはすごいよね。あれ、誰が思いついたんだろうとか。でも明らかに合理的すぎて、思いついたっていうことに喜びすら無いものもあるんだと思うんだけどね。そういうようなこ

とが出来るとっていうのがやっぱり面白いのかなってさ。だから普通に考えれば良いんじゃないかなって思うんだけどさ（笑）なかなかね、こう均質な世の中にいると、均質な社会にいると、普通に考えると皆同じ答えが出てくるだろ、だからそれがつまらない訳でさ。

石川 うん〜。この言葉を聞いた時に、さっきおっしゃっていたオリジナリティって言葉に引っ掛かっていて。パクられるっていう、まあ言い方悪いですけど、真似されると嬉しいというか、そういう価値観、建築史の流れの中に、自分を位置付けられるということに繋がっていく。

高橋 うん。そういうこともあるよね。そういうこともある。

石川 うんうん。

高橋 でもオリジナリティってなんなのかね？僕が作った建築、西沢事務所の建築に似てると思うし。

石川 へえ〜。

高橋 まあ、ちょっとあそこで、近代で柱がドミノシステムなんてのは超画期的なわけなんだけど。オリジナリティってなんなんですかねというのはよく思うよね、だって、スイスの建築見ても、これ篠原一男なのかなと思って、よく見たらスイスの建築家じゃなかったってよくあるじゃない。建築ってそういうものなんじゃないのかなあ。そこであんまり片意地はらなくても。そういう意味では発明を目指すのは僕は面白いことだと思うけどね。流れを変えていくわけだから、議論の場の。建築史はある種議論の場だよな、みんなで

会話しているような感じの議論の場。そこで何か話題を変えてくれる、変えるようなことをやるっていうのは面白いよね。こんなもんですかね、後なんかありますか？2時間位話してますけど（笑）もういい？（笑）

学生 長い間ありがとうございます。